

Title	芥川龍之介『白』論 : 不条理な変身をめぐって
Author(s)	西村, 真由美
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 98-109
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70987
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

芥川龍之介『白』論

——不条理な変身をめぐって——

西村真由美

一、〈童話〉の語り手の枠を越えて

芥川龍之介『白』は、大正十二年八月「女性改造」に発表された童話である。芥川は完成作として八作の童話を残している。大正七年、「赤い鳥」に『蜘蛛の糸』を発表したのを皮切りに、その後大正十年までの間に同雑誌に『犬と笛』『魔術』『杜子春』『アグニの神』の四作品を著し、そして大正十一年、「サンデー毎日」に『仙人』、大正十二年一月に「良婦の友」に『三つの宝』を発表した。『白』は八作のうち最後に位置する童話となる。

お隣の飼い犬である黒が犬殺しに捕えられようとしている場に遭遇し、恐怖に怯えて逃げ帰った白は、友を見殺しにした己の罪を象徴するかのような「黒色」の犬に変身してしまうが、白は善行を重ねた後、作品の最後に「白色」の姿に戻る。この物語に、芥川の小説に見られるものとは異質の「明るさ」や「健全さ」を指摘する論は少なくない。尾崎瑞恵氏は「白」は積極的に行動

することによって、昔の平和な生活に戻る点でさらに一歩を進めた物の見方にささえられて」おり、「エゴイズムからどうすれば脱却できるかを示したものである」とし、「小説では全く見られなかったような積極的な生き方を示し、子供たちの将来に明るい希望と夢を与えようとさえしている」と述べた。また、鳥越信氏も「蜘蛛の糸」や「杜子春」に見られたような、ものうい感じは全くなくて、文章全体に一種のほりがあり、徹頭徹尾明るく信じきった楽天的な気分が感じられる」としている。

また、先に挙げた尾崎氏と同様、白のエゴイズムに着目した論も多い。越智良二氏は、次のように述べる。

「蜘蛛の糸」では盲目的なエゴイズム衝動が描かれ、「魔術」では其れを自覚した自己反省が、更に「杜子春」では人間性の開眼が、そして、「白」ではエゴイズム克服の行動が描かれていた。」

この作品が〈我が身の助かりたさにお隣の黒を見殺しにした罰と

して黒犬へと変身させられた白が、善行を積んで元の白色に戻る話」という因果応報譚ととらえられやすいことには、この作品の〈語り〉の特徴も関わっている。

・「御覧なさい。坂を駆け下りるのを！　それ、自動車に轢かれさうになりました！」

・「あの自動車をこらんなさい。え、あの公園の外にとまつた、大きい黒塗りの自動車です。」

・「御覧なさい、坊ちゃんの威張つてゐるのを！」

語り手は読み手に向かって度々呼びかけの口調を用いる。それは、語られる光景が今まさに読者の目の前で繰り広げられているかのような臨場感を生み出し、幼い読み手をも作品の世界へと引き込まんでいく。また、「さもびつくりしたやうに、突然立ち止つてしまひました。それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏を着た犬殺しが一人、毘を後に隠したまま、一匹の黒犬を狙つてゐるのです」と、自らの意思を表出させ、「見知らぬ犬ならば兎も角も、今犬殺しに狙われてゐるのはお隣の飼ひ犬の黒なのです。毎朝顔を合わせる度にお互いの鼻の匂を嗅ぎ合ふ、大の仲良しの黒なのです」と、「お隣」で「仲良し」である黒を強調する。

・「その途端に毘が飛んだのでせう。続けさまにけた、ましい黒の鳴き声が聞えました。しかし、白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往来止めの縄を擦り抜け、五味ための

箱を引つくり返し、振り向きもせずに逃げ続けました。」

語り手は白の行動を批判的に語り、黒は白に見捨てられた「可哀さう」な被害者であり、白は自分の助かりたさに黒を見殺しにした加害者であるという方向性を示す。それゆえに、白のエゴイズムは強調され、着目されやすい。このような語りの特徴は、〈童話〉として年少者に物語を理解させるために、ある程度必然的なものではある。しかし、〈語りの枠〉にとられず作品を分析した時、さらなる読解が可能となるのではないか。『白』一編について論じた作品論は極めて稀少であり、平野晶子氏が、『白』の発表誌である「女性改造」の特色と同誌と芥川の関係について考察しているように、『白』について論じられる時、作品周辺へと目が注がれることが主であった。本稿では、『白』の本文を詳細に分析することにより、この作品にさらなる読解の可能性を示すことを目指す。

二、三様のエゴイズム—— 白・子どもたち・黒 ——

・「白は思わず大声に、「黒君！　あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教へて見ろ！　貴様から先へ毘へかけるぞ。」——犬殺しの目にはありありとさう云ふ嚇しが浮かんでます（中略）白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後ずさりを始めました。さうして又生け垣の陰に隠れるが早いか、可哀さうな黒を残した儘、一目散に逃げ出しました。」

・「白はもう命の助かりたさに夢中になつてゐるのかも知れませぬ。」

酒井英行氏が「この時の白は、『蜘蛛の糸』の健陀多の「自分ばかり地獄からぬけ出さうとする」「無慈悲な心」の権化であつたと見えよう」と指摘するように、白は我が身の助かりたさに、一目散に逃げた。それは結果として黒を見殺しにすることとなつたが、「自分さえ助かればよい」という気持ちが多量なりとも働いていたという点で、一種のエゴイズムといえることは間違ひなからう。

また、白は黒くなつた自分を殊更に嫌悪しており、「一つには何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥ぢる気が起つたから」とあるように、それは罪の象徴としての（黒さ）を厭うもののようにも見えるが、注視したいのは、心の醜さへの嫌悪だけとは言い難い、自らの白い容姿への優越感が色濃く作品中に見てとれることである。「まだ仔犬の時から、牛乳のやうに白く、「上品に延びた尻つ尾」を持つていた自分が「鍋底のやうにまつ黒」で「醜い黒犬」になつたという表現には、変身したことへの驚きだけではない、白い自分への自己愛が表れ出ている。自分だけは助かりたいというエゴイズムと、自己愛の心理は通底してゐるだらう。白く麗しい、何よりもかわい自分の守りたさに、黒の悲鳴を背後に聞きつつ白は命からがら逃げたのである。

しかし、エゴイズムは白だけにとどまる問題であらうか。他にも目を向けた時、見えてくるものがあるのではないか。

まず着目したいのは、「お嬢さん」と「坊ちゃん」である。「青あをした芝の上」で「ポオル投げ」をして遊ぶ「小さい主人」を見た白は「何と云へば好いのか」というほど「嬉しさ」を感じて、この二人のところへ飛んでいく。が、彼らは黒くなつた白を、我が家の愛犬だとは認識できず、「唯呆気にとられたやうに」眺める。そして「きつと狂犬だわよ」と怯える「お嬢さん」の言葉を聞いた「坊ちゃん」は、白を痛めつけて追いやってしまう。

・「現にお嬢さんは憎らしさうに、「まだあすこに吠えてゐるわ。ほんたうに凶々しい野良犬ね」などと地だんだを踏んでゐるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは小徑の砂利を拾ふと、力一ぱい白へ投げつけました。

「畜生！ まだ愚図々々してゐるな。これでもか？ これでもか？」

砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、血が滲む位当つたのもあります。」

お隣の黒の兄弟かと思つたほど黒くなつた白を「凶々しい野良犬」といつて追いやる「小さなご主人」は、（我が家の愛犬）である白しかかわいがない子どもたちであり、その点で、自分だけは助かるうとした白と似通つた意識を持つと言えよう。また、「見知らぬ犬ならば兎も角も、今犬殺しに狙はれてゐるのはお隣の飼ひ犬の黒なのです」という語りの根底にも、他はいざ知らず自分に関係のある範囲だけは事なきを得たい、という意識は流れてゐる。自分だけ助かるうとしたということを白のエゴイズムと

するならば、エゴイズムを持つのは決して白だけではない。

さらにいえば、それは物語の中で「可哀さうな黒」と被害者として語られる黒も例外ではない。

・「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

白の中で「虻のやうに唸って」いた黒の「助けてくれえ！」という叫び声は、特定の誰かに対して向けられたものではないが、恐怖や痛さなどに対する反射的な叫びとしての「きやあん」だけでなく、窮地に立った自分を助けてもらいたい——つまり、他人が危険を冒すことになったとしても自分だけは助かりたい——という感情が含まれたこの叫びには、黒がもつエゴイズムを読み取れる。我が身の守りたさゆえの白の逃走と、命助かりたさに誰かを求める黒の悲鳴は、決して異種のものではない。

また、「改心」した白の活躍ぶりを示す新聞記事も看過できない。これはたびたびの人命救助などの白の功績を報じるものであるが、その記述には、人間社会のエゴイズムや身勝手さが見え隠れする。

・「読売新聞 小田原町城内公園に連日の人気を集めてゐた宮城巡回動物園のシベリア産大狼は二十五日（十月）午後二時ごろ、突然頑丈な檻を破り、木戸番二名を負傷させた後、箱根方面へ逸走した。小田原署はその為に非常勤動員を行ひ、全町に亘る警戒線を布いた。すると午後四時半ごろ、右の狼は十字町に現れ、一匹の黒犬と噛み合ひを始め

た。黒犬は悪戦頗る努め、遂に敵を噛み伏せるに至つた。其処へ警戒中の巡查も駆けつけ、直ちに狼を銃殺した。この狼はルプス、ヂガンテイクスと称し、最も兇猛な種属であると云う。なほ、宮城動物園主は狼の銃殺を不当とし、小田原署長を相手どつた告訴を起すといきまいてゐる。」

「最も兇猛な種属」の「大狼」を「頑丈な檻」にいて眺めることが「人気を集め」、さらにそれが逃げれば殺すという人間のエゴイズムが描かれる。また、町中に狼を逃がしてしまうという失態をおかしながら、「連日の人気」を集めていた絶好の商売道具を奪われ、憤る「宮城動物園主」の姿も注目される。

物語は白を中心に展開する上、語りの効果も影響して、白のエゴイズムに注目が集まりがちであるが、決してそれは白だけの問題ではない。人間の大人たちは勿論、清純そのものに見える「お嬢さん」「坊ちゃん」をはじめ、黒にいたるまで、共通するものとして描かれているのである。

三、白への罰という不条理——〈正義〉の不確かさ——

・「お月さま！ お月さま！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまつ黒になつたのも、大かたそのせいかと思つてゐます。」

白は黒くなつたのは黒を見殺しにしたためだと思つている。白はその黒さを見ては「臆病」を恥じ、「臆病」にならないように自分を奮い立たせて善行を積んだ。これは自らのエゴイズムの自

覚とその克服であるかのように見える。そして最後に死をも覚悟の上で、愛するご主人のもとに戻ったとき、白は白い犬に戻った。

しかし、本当に白が黒くなったのは見殺しにした罰だったのだろうか。そして、最後に白い自分に戻るの、自らの行いを恥じた白が数々の善行を積み、それが報われた結果だったのだろうか。この作品の中では、白が黒くなった理由も、白く戻る理由も明示されてはいない。白自身も「大かたそのせいかと思つてゐる」とあるように、その原因は定かではなく謎のままである。

お月さまに向かつて「わたしは黒君を見殺しにしました」と白は言うが、注目したいのは、犬殺しに遭遇して、白が家に逃げ帰ってきたときには、白は自分が悪いことをしたとは全く思っていないことである。

・「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存知ですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりました。が、お隣の黒君は掴まりましたぜ。」

悪いのはあくまでも犬殺しであつて、白にはもともと「黒を見殺しにした」という意識はなかった。犬殺しの視線に我が身の危険を感じ逃げた白は、黒に危険を伝えることができず、耳の底に「黒の鳴き声が虻のやうに唸つて」いる中逃げ帰る。しかし、それは自責の念というよりは、ただ「黒の死」という怖ろしい場面に遭遇した恐怖でしかない。その後、黒く変身した自分に気付いた白は、その理由は黒を見殺しにしたせいだろうと考えているが、しかし、それはあくまでも後付けのものにすぎず、それしか思い

当たる節がないがゆえに、そのように解釈しているだけである。

が、そもそも、白はそんなに罰を受けねばならないほど悪いことをしたのだろうか。白は確かにエゴイズムといえるものを持つてはいたが、しかしそれは白だけに限つたものではないことは先に確認した通りである。そうであれば、なぜ白は黒くならなければならなかったのか。また、木村小夜氏も「白が黒くならなかつたのが、自身が考えていたように黒を「見殺しにし」たためであるのならば、数々の命がけの善行によつて白は遠の昔に報われている」と指摘するように、我が身かわいさに黒を見殺しにしたというエゴイズムが黒犬への変身の理由なのであれば、身を捨ててまで善行を積んだ白がずっと黒犬のままであつたということも不可解である。

確かに白が黒に危険を伝えることが出来れば、黒の後は変わったものになつていたかもしれない。語り手が「臆病風が立ちだした」「白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません」と批判的に語るように、白の行為は見殺しという意味では「罪」かもしれない。しかし、白が逃げたのには自己防衛のためだったのであり、そもそもが、黒が犬殺しに殺されたのは別に白に責任であるわけではなく、犬殺しの投げたパンに飛びついてしまった黒自身の不覚のためであることは間違いない。

また、自己防衛のため犯す「罪」が、この作品中では他にも描かれている。黒を殺し「それは恐ろしいやつ」とされる「犬殺し」という存在も、広い意味でいえば人間の自己防衛のために生

み出されたものの一つと言えるだろう。明治から戦後に至るまで、狂犬病の流行は人々を悩ませてきた。今川勲氏⁽⁷⁾は、狂犬病対策と犬殺しについて言及し、「白」が執筆された大正末期には「狂犬病予防週間」が盛んに設けられ、野犬掃蕩に関する補助金が給付されるなど取り締まりが強化されたことを指摘している。大正十五年八月一日から七日にかけておこなわれた「狂犬病予防週間」では、四万一千百十一頭の野犬が掃蕩されたという。明治二十四年に発表された巖谷小波の『こがね丸』や明治四十年に発表された二葉亭四迷『平凡』にも犬を襲う恐ろしいものとして「犬殺し」が登場し、また大正十三年に発表された松永延造『職工と微笑』の中でも、犬殺しという仕事について、人間の「残忍」を世間のために有効に使う手段が「犬殺し」であると述べる一節が見られるように、「犬殺し」という存在は時に怖れられ、時に卑しいものとして描かれるが、この「犬殺し」の犬を殺すという〈罪〉には狂犬病の予防、犬の危害の防止するという一応の理由がある。二葉亭四迷の『平凡』で、飼っていたポチが犬殺しに殺されたのではないかという場面で、ポチには札がついているから大丈夫だという「私」に対し、近所の子どもが「札が附いているも、殺されますから」と言うことが描かれているように、すべての捕獲・打殺が本来の目的のものであったかは疑わしいものの、表向きとしてはこの犬殺しもまた、広い意味で言えば人間たちの自己防衛のために殺しを行っているという大義名分を持っているということになる。

また、犬殺しが狂犬病予防のための野犬取り締まりを大義名分としていることを考えると、黒くなつてしまった白が吠え続ける姿を見た「お嬢さん」「坊ちゃん」の会話も見逃せない。

・「あら、どうしませう？ 春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お嬢さんは其処に立ちすくんだなり、今にも泣きさうな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢です。白は忽ち左の肩をばかりとバットに打たれました。と思ふと二度目のバットも頭の上へ飛んで来ます。」

「狂犬」だとバットで白を打つ子どもたちと、狂犬病から人々を守るために犬を殺す犬殺しには、やや重なるものがある。もちろん、「お嬢さん」と「坊ちゃん」が自己防衛のためにバットで打ったのはやむをえないものであり、作品中で描かれる犬殺しのイメージとはかなりかけ離れたところはある。しかし、自己防衛のために逃げた白が〈罪〉とされるなら、自己防衛のために実は狂犬でも何でもない犬の頭にバットを振り下ろす子どもたちの行為もまた〈罪〉である。自己を守ろうとして逃げたために白が黒犬になったのなら、黒を殺した「犬殺し」は勿論、この「お嬢さん」「坊ちゃん」にもしかるべき制裁があつてもおかしくはない。しかし、彼らは物語最後まで平穩に暮らし続ける。ある日突然黒犬に変身させられることなどはない。

また、「ナポレオン」という仔犬をこどもたちがいじめている場面に注目する。助けを求めるナポレオンの声に、白は黒の叫び

声を重ね合わせて身震いするものの、同じ過ちを繰り返すまいと白は声のする方へと駆けつける。そこでは子どもたちが仔犬をひきずり騒いでいた。

・「唯學校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、頸のまはりへ縄をつけた茶色の仔犬を引きずりながら、何かわい／＼騒いでゐるのです。仔犬は一生懸命に引きずられまゐともがきもがき、「助けてくれえ」と繰り返してゐました。しかし子供たちはそんな声に耳を貸すけしきもありません。唯笑つたり、怒鳴つたり、或は又仔犬の腹を靴で蹴つたりするばかりです。」

ナポレオンは縄をつけられた仔犬であり、子どもたちに何か危害を与える気配もない。犬殺しから黒が受けた暴力や、狂犬と間違われた白が「坊ちゃん」から受けた暴力に比べれば、このナポレオンへの暴力は程度の軽いものではある。しかし犬殺しや「坊ちゃん」の場合とは違い、このナポレオンへの暴力だけは自己防衛のためではない純粹ないじめである点で、この子どもたちの行為は最も深い〈罪〉である。しかし、彼らは白に追いやられて怖い目にあうという程度の〈罰〉は受けるものの、家を追われ自殺願望をいだくに至るほどの〈罰〉を受けることはない。

このように見ていくと、〈悪いことをしたために白には罰が当たった〉というとらえ方には無理があり、〈罪のために黒くなつた〉ということ自体が、そもそも思い込み過ぎるのではないのかと思えてくる。黒が殺されたのは白のせいではないのに、そし

て自分こそが助かりたいと願つたのは白だけではないのに、なぜか白だけが黒犬へ変身させられるという憂き目にあつてしまった。それは極めて理不尽で不条理なことだが、その不条理が、ただ偶然ある日に白の身に起きたという、ただそれだけのことではなかったか。その不条理を白自身が、自身のエゴイズムへの〈罰〉だと勝手に思い込み、自分の臆病を責めることで納得し、不条理に整合性を与えようとしたとは考えられないか。因果応報譚としてではなく、不条理さを内包した物語として、この作品を読み解いてみる。

特別悪いことをしたわけではないのに白が黒犬に変えられてしまうことと同様、理不尽なことがもう一つある。それは、すべての出来事の発端ともいえる、〈黒が犬殺しに狙われて殺されてしまう〉という事件である。先ほどにも挙げた、二葉亭四迷『平凡』のボチと同じく、黒は歴とした飼い犬であり、野犬ではない。それなのに、「野犬の取り締まり」という正義のために、飼い犬の黒は殺された。それは甚だ理不尽なことである。犬殺しは社会のために野犬を取り締まるという〈正義〉をかざしながら、知つてか知らずか、本来は殺す必要のない飼い犬の黒を殺している。その〈正義〉は非常に不確かなものといえる。

また、あの犬殺しに遭遇した日、黒くなってしまった白が、その突然の出来事に狂つたように吠えたとき、狂犬ではないかと怯える姉の声を聞いた「坊ちゃん」は、その危険から姉を守らねばという勇敢な正義感からバットで犬を打つたが、その〈正義〉の

ための行動もまた、実は知らずに愛犬を殴るという事態へと繋がった。何かを守ろうとし、〈正義〉として信じたその行いは、実は無関係な何かを傷つけるだけで終わった。

また〈正義〉といえ、黒犬となった白は度々人命を救う「勇ましい一匹の黒犬」として生き、その姿を「いろいろの新聞」が伝えたのである。しかし、話はそこで終わりはしない。

・それは一つには何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥ぢる気が起つたからです。けれどもしまひには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、或いは火の中へ飛び込んだり、或いは又狼と戦つたりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪はれませんでした。死もわたしの顔を見ると、何處かへ逃げ去つてしまふのです。

世間は、たびたび人命救助をする黒犬を「勇敢」で「けなげ」な神の使いのような「義犬」と称えたが、実はそれらの行為は自殺願望ゆえであったことが明かされる。ここには〈正義〉という建前や、世間の評価というものが非常にあやふやで不確かなものであるということが、見え隠れする。

・「きやあん。きやあん。助けてくれえ！ きやあん。きやあん。助けてくれえ！」

この声は又白の耳にはかう云ふ言葉にも聞えるのです。

「きやあん。きやあん。臆病ものになるな！ きやあん。臆病ものになるな！」

白が努めて勇猛な犬としてふるまつたのは、臆病のために黒を見殺しにしたせいで黒くなった、という意識が、自分を変える方向へと白を駆り立てたからである。そして、自分が〈正義〉でなかったために黒くなったと信じ、その贖罪かのように戦い続ける白が、いくら善行に励んでも白くなることはなく、戦つて死ぬことを望んでもかなわないことからは、この白の思っている「臆病ものになるな！」という〈正義〉もまた、非常に不確かなものである可能性がうかがえる。臆病さや見殺しにしたことは全く異なるところに、きわめて不条理なものとして黒犬への変身ということはあり、そして、白が白犬へと戻ることもまた、エゴイズムの克服といったこととは違つたところにあるものだったのである。

四、「白」へと戻るといふこと——「わたし」ばかりの白——

・「お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見る外に、何も願ふことはありません。その為に今夜ははるばるともう一度此處へ帰つて来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会はして下さい。」

お月様に語りかけ、そしてもとのご主人の庭へと戻つてきた翌朝、白は突然元の白犬へと戻つた。ここで、なぜ白は白犬へと戻るのか。命を顧みず戦つてもずっと白は黒いままであったし、苦しき故に死を望んでも、それすら叶えられなかった。それなのに、なぜ主人の庭へと戻つたこの日、元の白犬に戻るのか。これは、

〈さほど悪いことをしたわけでもないのに、なぜ白だけが黒犬へと変身させられなければいけなかったか〉という疑問と同等に、不可解な出来事である。ここでの白犬への変化もまた、不条理なものではないか。白は、不条理にも黒くなり、また不条理にも白犬へと戻された。そこには、理由も何もなく、ただ偶然にそういう運命が白へと降りかかってきただけだった。問題は、それを白自身が「わたし」が「黒君を見殺しにし」たことが黒犬になった理由だと思ひ込んでいるということにあるのではないか。そして白とエゴイズムの関係についても新たに捉えなおすべきところがあるのではないか。

「何かの拍子に煤よりも黒い体を見ると、臆病を恥じる気が起つた」とあることは、白のエゴイズムの自覚を示すかのようにも読める。しかし、この黒色への嫌悪は白が黒くなったことに気付いた最初の時点では、「臆病」を恥じることに起因していなかったことに注目したい。

・「何處の犬！ 今度は白の方が呆氣にとられました。（中略）

「何處の犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

・「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまつ黒になつてゐても、やつぱりあの白なのですよ。」

黒色への嫌悪は、自分自身を認識してもらえないことへの嘆きゆ

えのものだった。到底不可能なことではあるが、仮に、〈黒くなつていても、自分は白なのだ〉と「お嬢さん」たちに認めてもらえるということがありえたならば、白はこれほどまでに辛くはなかつたはずだ。

「客の顔を映してゐる理髪店の鏡」、「雨上がりの空を映してゐる往來の水たまり」、「往來の若葉を映してゐる飾り窓の硝子」など、白が黒くなつた自分の姿を映すものを恐れている様子が作品中には描かれている。本稿の第二章で、白が美しい自らの容姿に優越感を持つていること、白い自分への自己愛が読み取れることを指摘したが、黒くなつた自分を映すものを白が恐れたのは、自己愛からだけではあるまい。何かに映る自分を見ることを恐れたのは、自分が自分だと誰にも認識してもらえないことを再確認することが辛かつたからではないか。そして、自分を認識されなくなつたのは黒くなつてしまつたからであり、黒くなつた理由は、友を見殺しにしたことしか思い当たらなかつたからこそ、その見殺しにした自分の「臆病」を憎んだのである。もしも、黒くなつてもお嬢さんや坊ちゃんに愛されて暮らせたなら、白い自分への自己愛から黒さを嫌いにしても、死の危険をおかして強敵と戦うほど「臆病」を恥じたり、「黒いわたしを殺した」くなるほど黒さを厭うことはなかつたはずである。白の悲しみは、黒を裏切つた身勝手な自分への嫌悪にあるというよりは、飼犬として所屬を持ち、〈我が家の白〉として認められていた自分が自分と認識されない絶望にある。

白も、黒も、ナポレオンも、作品中に登場する犬はすべて飼いだばかりである。白に助けてもらった後、ナポレオンは貧しいカフェの前で「得意さうに」「僕は此處に住んでゐるのです」と言い、「おぢさんは何處に住んでゐるのです?」「おぢさんの御主人はやかましいですか?」と尋ねるが、ナポレオンは帰る家という所属の場があることを当然と思つてゐる。また、犬殺しの恐怖に遭うことのない守られた庭に帰つてきて、当然ご主人たちは自分をかわいがつてくれるものと思つてゐた白が、「お嬢さん」や「坊ちゃん」に自分だと気付いてもらえないと気付いた時、白の声は「何とも云はれぬ悲しさと怒り」に震えた、とあることから、白もまた所属の場があることを当然のものとして捉えていたことが窺がえる。その当然あるべき守られた場所を失つた時、白はこんな目にあつたのは自分の臆病のせいだと考え、そのことへの悲嘆と後悔が、白を以前とは違ふ勇敢な犬へと変えた。「尻つ尾を振りながら」ご主人のもとに飛んでいき「わたしは助かりましたが、お隣の黒君は掴まりましたぜ」と報告してゐた白が、「火のやうに燃えた眼の色」で吠えかかり、〈正義〉のために戦う勇猛な犬として振る舞うようになるのだ。しかし、白を奮い立たせた「臆病者になるな!」という内なる声は、自分をご主人に見つけてもらえないような黒犬に変えた「臆病」を「わたし」から消し去ろうとするものであり、白の意識は、可哀想なナポレオンにあるのではなく、あくまでも、「臆病」のせいでこんな憂き目にあつてしまつた自分自身に注がれている。

白が抱えるエゴイズムは、ここにこそあるのではないか。黒を見殺しにしたことが自身の変身の理由だととらえながら、白は不幸にも命を落としたお隣の黒のことに想いを馳せることも、悼むことも全くしない。白の頭の中を占めてゐるのは、黒犬への変身に気付いた時も、ナポレオンを助ける時も、いつも「わたし」のことであつた。「義犬」として称えられるほど多くの人を救つたことさえも、「黒いわたしを殺したさ」ゆえだつたのである。白の意識は常に「わたし」がどうあるか、どうするかという点にある。

白は、「野良犬と思われて」、「坊ちゃん」のバットで打ち殺されたとしても「本望」だから、「ご主人の顔」を一目見たいと、お月様に語つてゐた。ここでは白の想いは自分自身ではなく、愛するご主人へと馳せられるように思える。しかし、いざ目の前に愛しいご主人たちが現れた時の白は、非常に浮かない様子である。

・「白は小さい主人の声に、はつと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇んだ儘、不思議さうに顔を見合わせてゐます。白は一度挙げた目を又芝の上へ伏せてしまひました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまつ黒に變つた時にも、やはり今のやうに驚いたものです。あの時の悲しさを考へると、——白は今では帰つて来たことを後悔する気さへ起しました。」

ここでも、白の意識は一目会いたかつたご主人に会えたという

ことへではなく、（自分が自分と認められない悲しさ）にばかり向けられている。そして「坊ちゃん」の言葉によって、白は自分の体が元の白色に戻ったことを知る。

・「白が！ 白は思はず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでせう。お嬢さんは両手を伸ばしながら、しっかりと彼の目を移しました。同時に白はお嬢さんの目へ、ちつと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映つてゐます。高い棕櫚の木のかげになつたクリム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違ひありません。しかしその犬小屋の前には米粒程の小ささに、白い犬が一匹坐つてゐるのです。清らかに、ほつそりと。——白は唯恍惚とこの犬の姿に見入りました。」

かつて、白が黒色の自分の姿を映し出すものを恐れていたことは本章でも先に触れたが、ここで「お嬢さんの目」に映る白色の自分を見るという構図が描かれていることは興味深い。そして、白色に戻った白は、念願がなつて（我が家の白）として愛するご主人たちに迎えられる。しかし、ここでも白の意識は、お嬢さんに抱きしめられる温もりや、再会の喜びへではなく、「清らか」で「ほつそり」とした我が姿に「恍惚」と見入るといふように自己愛へと向いていることに注目したい。

黒犬へと変身させられてしまうことがエゴイズムへの罰なのでもなければ、白犬に戻ることがその克服なわけでもない。問題は、黒を見殺しにしたことが黒犬への変身の理由と勝手に思い込んだ

白が、贖罪かのように見える善行を積む間も、はたまた白犬に戻つてからも、いつもずっと「わたし」のことしか考えていないところにあるのではないか。

黒犬への変身を、黒を見殺しにしたためと考えている白は、白く戻つた自分の姿を見た時、自分の命がけでの〈正義〉のための奮闘がついに認められ、許されたのだと思うだろう。白犬へと戻ることは、〈エゴイズムの克服〉を自分が成し遂げた結果なのだと捉えるに違いない。しかし、そのような白の認識とは裏腹に、他の誰のことも考えず、ただ自分のことばかりを考えている白の中に、エゴイズムは今もずっと渦巻いているのだ。

五、 おわりに

白の変身はエゴイズムとは関係のない不条理なものであるという点、そして白は最後までエゴイストであり続けているという点を軸としながら、この作品の読解を試みてきた。しかし、この作品に物憂さは一切なく、最後に「お嬢さん」「坊ちゃん」に白が迎えられるシーンも、非常に明るく屈託のないものとなっている。そこにはやはり語りの効果が大きく関わっている。本稿の一つも確認したとおり、語り手は（黒は被害者であり、白は加害者）という目線からこの作品を語っていた。その加害者である白が必死の奮闘の末に白い白色へと戻つたことを、語り手は感動的に語る。白自身と同様に、この語り手もまた、白の中にあり続けるエゴイズムには全く気付かない。

白が黒犬になってしまったように、予測もしなかったことがある日突然身に降りかかることは世の中には少なからずあるうが、そのすべての出来事に必ずしも明確な因果関係があるわけではなく、極めて不条理な出来事であることも少なくない。しかしその時、不条理なことと思いつけることが出来ず、自分なりに因果関係を類推することで納得を得ようとすることは往々にしてであろう。そして、反省や贖罪を試みるも、頭の中を占めていることの根本は他の誰でもない「わたし」のことでしかないということも、白に限った話ではない。不条理な変身をエゴイズム故のものと思いつ込んで奮闘を重ねた白が、白犬に戻ったことで自分の罪がつかいに許されたと思っているにもかかわらず、結局は最後まで「わたし」のことにしか考えていないエゴイストであるということには、人間のエゴイズムへの強い風刺が込められているのではないかと。そして、最後まで白の根本的なエゴイズムには気づきもせず、「白＝加害者」という観点からこの作品を語る語り手や、白を義犬として評価してもはやす人間たちは、無責任で不確かな評価しか出来ない他者の象徴なのではないだろうか。

注

- (1) 尾崎瑞恵「芥川龍之介の童話」〔文学〕1970年6月)
 (2) 鳥越信「芥川龍之介における『童心』」〔国文学 解釈と教材の研究 1972年12月臨時増刊号〕
 (3) 越智良二「芥川童話の展開をめぐって」〔愛媛国文と教育〕

1989年12月)

- (4) 平野晶子「女性雑誌という舞台——芥川龍之介「白」と「女性改造」」〔学苑〕2012年9月)
 (5) 酒井英行「芥川龍之介の童話(続)」〔藤女子大学国文雑誌〕1991年3月)
 (6) 木村小夜「芥川童話における〈因果〉再検討——「蜘蛛の糸」から「魔術」へ——」〔福井県立大学論集〕第十号 1997年2月)
 (7) 今川勲「犬の現代史」〔現代書館 1996年〕

【付記】

本文は全て『芥川龍之介全集 第六卷』(岩波書店、1978年1月23日発行)による。巖谷小波『こがね丸』は『明治文学全集 二十卷』(筑摩書房、1968年)、松永延造『職工と微笑』は『松永延造全集第一卷』(国書刊行会、1984年)、二葉亭四迷『平凡』は『二葉亭四迷全集第一卷』(筑摩書房、1984年)より引用した。旧字は適宜新字に改め、ルビは省いた。なお、傍線及び省略記号は全て稿者の付したものである。

(にしむら・まゆみ 本学博士後期課程修了)